

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520238

研究課題名(和文)8世紀日本の文筆活動の研究

研究課題名(英文)Study on "BUNPITSU KATSUDOU(Literary Activity)" in the 8th century's Japan

研究代表者

高松 寿夫 (Hisao, Takamatsu)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40287933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって得られた顕著な成果は以下のとおりである。

1) 大宝2年派遣の遣唐使には、文書行政を始動させるための参考文献の収集が任務として課されており、『文館詞林』などを持ち帰ったらしい。2) 『五経正義』『唐太宗実録』など初唐期の文献が、8世紀初頭には日本に将来され、作文の参考に供されていたことを実証した。4) 安倍広庭「春日侍宴」(『懐風藻』所収)は、虞世南詩を享受していることが判明し、同詩を収録していたと思われる虞世南または隋煬帝の別集の将来が推定される。5) 山上憶良の語彙形成には、仏教語彙が大きな影響を与えている。この傾向は、同時代の日本の文筆全般にも及ぼして考えることができる。

研究成果の概要(英文)：The remarkable results of the study are as follows:

1) Japanese official diplomatic delegations sent to China in A.D.702 during 唐 dynasty had a mission to collect Chinese books for referring in order to start state control of documents. It is considered that they brought some books, e.g. 文館詞林, etc., in Japan. 2) I have confirmed that the documents in the early 唐 period, e.g. 五経正義 and 唐太宗実録, were already brought in early 8th century's Japan and used for referring to write sentences. 3) I have found that a Chinese poem on "春日侍宴" of 安倍広庭 in 懐風藻 had a lot of similarities to the poem of 虞世南, at its vocabularies and ideas. As a result, it has come to light that the anthologies of 虞世南 or 煬帝 in 隋 dynasty, being supposed to include that poem, were brought in Japan at that time. 4) I have confirmed that 山上憶良's way to create vocabularies was greatly influenced by Buddhist vocabularies.

研究分野：日本文学

キーワード：日本漢文 懐風藻 万葉集 続日本紀 仏教語彙 文館詞林 唐太宗実録

1. 研究開始当初の背景

8世紀の日本文学といった場合、現在、主要な対象となるのは『万葉集』掲載の和歌や『古事記』『日本書紀』風土記に掲載される神話・説話であるが、この時代のテキストの圧倒的な割合は漢文が担っていた。特に『続紀』掲載の行政文書は、成立年代が特定できるテキストとして、きわめて充実した量を有している。行政文書というと、機能性重視の無味乾燥なテキストで、文学研究の対象とはなり得ないかの印象を伴いかねない。たしかに、その傾向が濃厚な一面がある一方、実はその時代の知性を凝縮した堂々たる作文も少なくはない。特に、天皇の重要な政策や方針を主張する詔勅類には、語彙や表現に特段の注意が払われた、時代の知の精華とも言うべきテキストが多い。いわゆる「文章経国」の理念に照らしても、行政文書 特に時代を画するような場面で発表されるそれ には、文学研究の面からこそ、光が当てられるべき質が存している。しかし、それらテキストを、文学研究の対象として本格的に扱う機運は、未だそれほど高まりをみせているとは言い難い状況にある。申請者は、そのことに対する物足りなさ、申請者なりのビジョンを、2010年ごろからしばしば論稿の中で主張してきた。また、それらの論稿の準備をとおして、このテーマに基づく研究の必要性和、広がりの可能性を実感した。『続紀』掲載のテキストを重要な対象とするのは、年代が確定できるテキストとして質・量ともに充実していることによるのであり、最終的な目的は、8世紀のテキストの総合的な傾向を俯瞰することにある。個別のテキストを超えた、その時代に書記されたテキストの汎称として「文筆」という呼称を提唱し、それらを紡ぎ出す営為を「文筆活動」と呼び、当研究の課題とするものである。

さらに、研究を進めるなかで、近世、特に江戸時代後期の『続紀』研究においては、本文の踏まえる漢籍典拠についての指摘が、かなり充実していることを再認識するに至った。その指摘は、近現代の注釈等に引き継がれる部分もあるが、かえりみられないままのものも少なくない。また、先学へのリスペクトが示されないまま、近世の指摘が現代の注釈書などに引き継がれている例も多い。学説のオリジナリティを尊重する意味からも、近世期の研究成果の再評価も積極的に行われるべきと考える。一方、近年の各種電子データの充実は、語彙の用例や出典調査に甚大な便宜をもたらしている。その電子データを駆使して、新たな用例・典拠を求めることも、重要な作業のひとつとならされる。

2. 研究の目的

『続日本紀』に掲載される詔勅その他のときどきの行政文書を、成立年代が明確なテキストとして捉え、その語彙、踏まえる典拠、表現方法等の分析をとおして、8世紀における

日本の文筆の実態を明らかにする。併せて、同時代の他のテキスト(『日本書紀』『律令』『万葉集』特にその題詞・左注等漢文部分『懐風藻』風土記...)との相関性にも考察を及ぼし、この時期の文筆活動の総合的な把握を試みる。近世の『続紀』研究の諸資料にも注目し、研究史の再検討も行う。

3. 研究の方法

以下の4点を計画の柱とした。

1) 『続紀』掲載のテキスト中心に、『8世紀日本文筆集成』を編集する。これは、『続紀』が引用する行政文書の本文を抜き出すもので、おのずと8世紀の編年文書集の体裁を有する資料になるはずである。

2) 上記『8世紀日本文筆集成』に収録されるもののうち、文学研究の観点から重要と思われるテキストに対して、注釈または論文を執筆する。一定の分量を有し、表現面にも意匠を凝らした作文を対象とすることで、その作文をめぐる諸状況(書き手の語彙・手元にあった文献等)を明らかにすることが期待される。

3) 『8世紀日本文筆集成』に基づきつつ、『8世紀日本漢語集成』を編集する。個々の作品を越えて、その時代に定着していた語彙を見極める目安となることが期待され、作品の解釈にも資するところが大きいと思われる。

4) 国学者手沢の『続紀』版本の書込みを中心に、近世の『続紀』研究に関する文献の調査を行い、基本的な情報を報告する。

4. 研究成果

8世紀の文筆がどのような実態を有し、どのように推移したかを、具体的に跡付けることが本研究の目的であるが、その点に関してこの間に得られた顕著な成果と思われるものを、以下に列挙する。

1) 『続日本紀』掲載の行政文書の1件あたりのテキスト量を計量したところ、その平均字数が、慶雲元年の遣唐使帰還を境に飛躍的に増加することが判明した。帰還した遣唐使(大宝2年出発)の本来的な任務として、律令制下の文書行政を始動させるにあたり、その参考となる文献の収集があったのではないかと推定される。このときに日本に将来された具体的な文献として『文館詞林』が想定で、そのことはたとえば、慶雲3年正月12日の新羅使への勅書の表現が、『文館詞林』掲載の対百濟・新羅文書の受容として確認できる。(論文「大宝二年度遣唐使が日本の文筆にもたらしたもの」として発表。)

2) 大友皇子「述懐」(『懐風藻』所収)は、現存する最古の日本漢詩であるが、この詩に見える「天訓」という語は、従来は「天の教え」などと解釈されてきたが、実は「皇帝の教え」といった意味で理解すべきであり、それは唐の太宗・高宗期に一時用いられた用法に倣ったものである可能性が高く、これまでに知られていない初唐の文筆受容として評

価できる。(論文「大友皇子「述懐」詩読解」
として発表。)

3)『五経正義』『唐太宗実録』が8世紀初頭には日本に将来され、作文の参考に供されていたことを実証的に示すことができた。特に『懐風藻』序は、天智天皇(同序では理想化された存在として位置づけられる)が文学に対して抱いた意思とされる「調風化俗。莫尚於文。潤徳光身。孰先於学」という文言は、まったく唐太宗の発言から転用したもので、その他にも、同序には、太宗期の言説を学ぶ部分が少なくないことが指摘でき、顕著な『太宗実録』撰取の例と考えられる。(論文「八世紀初頭の日本の文筆にみる『五経正義』の受容」「『懐風藻』序文にみる唐太宗期文筆の受容」などとして発表。)

4)安倍広庭「春日侍宴」(『懐風藻』所収)の分析により、当該詩が虞世南詩を享受していることが判明し、同詩を収録していたと思われる虞世南または隋煬帝の別集の将来が推定される。(論文「万葉歌人の漢詩 安倍広庭「春日侍宴」をめぐって」として発表。)

5)山上憶良の漢文の分析をとおして、彼の語彙形成には、仏教語彙が大きな影響を与えていることを指摘した。それは、仏教思想に深く影響を受けての結果というよりは、ごく普通に作文をしてもあらわになってしまう基礎的な文体・語彙形成の問題として理解したほうがよいほど、文脈や主張とは直接かわらないかたちで認められる。また、この傾向は、同時代の日本の文筆全般にも及ぼして考えることができる可能性も指摘した。(論文「山上憶良「沈痾自哀文」と仏教語彙」「山上憶良の語彙をめぐる諸問題 「沈痾自哀文」を中心に」として発表。)

「3. 研究の方法」に記した『8世紀日本文筆集成』『8世紀日本漢語集成』については、前者については、『続日本紀』に基づく部分は、電子ファイルの形式でほぼ完成させ、いつでも提供できる状態である。後者については、作業を進めつつあるが、「漢語」の認定に思いのほか手間取り、まだ十分に作業が進展していない。この作業をとおして、改めて「漢語」とはなにかということの問題意識の重要性を認識している。なお継続して作業を進めて行きたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

1. 高松寿夫,山上憶良の語彙をめぐる諸問題 「沈痾自哀文」を中心に,『美夫君志』90,14-26,2015年,査読有
2. 高松寿夫,菅原道真「重依行字、和装大使被誚之什」(『菅家文草』巻二 105)『早稲田大学日本古典籍研究所年報』8,63-70,2015年,査読無
3. 高松寿夫,万葉歌人の漢詩 安倍広庭「春

日侍宴」をめぐって,『国学院雑誌』116-1,144-158,2015年,査読無

4. 高松寿夫,『懐風藻』序文にみる唐太宗期文筆の受容,『万葉』218,21-34,査読有,2014年
5. 高松寿夫,山上憶良「沈痾自哀文」と仏教語彙,『万葉集研究』35,129-175頁,査読無,2014年
6. 高松寿夫,赤人、憶良と家持,『高岡市万葉歴史館叢書』26,117-138頁,査読無,2014年
7. 高松寿夫,大江朝綱「奉和裴使主到松原後、読予鴻臚南門臨別口号、追見答和之什[次韻]」(『扶桑集』巻七 67),『早稲田大学日本古典籍研究所年報』7,51-58頁,査読無,2014年
8. 高松寿夫,大友皇子「述懐」詩読解,『早稲田大学大学院文学研究科紀要』59(第3分冊),3-14頁,査読無,2014年
9. 高松寿夫,明日香皇女挽歌 明日香川のほとりで亡き皇女を哀悼する,『明日香風』125,20-23頁,査読無,2013年
10. 高松寿夫,大宝二年度遣唐使が日本の文筆にもたらしたもの,『アジア遊学162 日本における「文」と「ブンガク(bungaku)」』(勉誠出版),82-92頁,査読無,2013年
11. 高松寿夫,八世紀初頭の日本の文筆にみる『五経正義』の受容,『東アジアの漢籍遺産 奈良を中心として』(勉誠出版),153-168頁,査読無,2012年
12. 高松寿夫,和歌の機能 草創期から確立期まで,『世界へひらく和歌 言語 共同体 ジェンダー』(勉誠出版),81-90頁,査読無,2012年
13. 高松寿夫,「遷都平城詔」注解 元明朝文筆の解明への手がかりとして,『比較文学年誌』48,59-78頁,査読無,2012年
14. 高松寿夫,平安時代前期の『唐太宗実録』受容に関する覚書,平安朝文学研究20,90-92頁,査読無,2012年

[学会発表](計8件)

1. 高松寿夫,唐僧惠雲の生物学講義 『妙法蓮華経釈文』所引「惠雲云」の言説 国際シンポジウム「東アジア文化交流 人と物の流通を中心に」2015年 中国・温州医科大学
2. 高松寿夫,日本上代の『孝経』受容と天平宝字元年四月四日勅 国際シンポジウム「東アジアにおける孝の文化」2013年
3. 高松寿夫,『懐風藻』編者をとりまく文筆状況 第66回萬葉学会全国大会 2013年
4. 高松寿夫,外交が拓いた日本文学 5世紀から8世紀を視野として 国際シンポジウム「東アジア世界における筆談の研究」2013年
5. 高松寿夫,赤人、憶良と家持 '13 高岡万葉セミナー ; 歌の道 - 家持へ,家持から - 2013年
6. 高松寿夫,山上憶良と読書 「沈痾自哀文」

を中心に 美夫君志会例会 2012 年

7. 高松寿夫, 逸存資料としての『日本書紀』
『続日本紀』国際シンポジウム「東アジア
文学及び文化交流」 2012 年
8. 高松寿夫, 8 世紀初期の日本における《詔》
という文体の獲得 日本における「文」の
世界・伝統と将来 2012 年

〔図書〕(計 4 件)

1. 早稲田大学日本古典籍研究所年報 第 8
号 2015 年
2. 早稲田大学日本古典籍研究所年報 第 7
号 2014 年
3. 早稲田大学日本古典籍研究所年報 第 6
号 2013 年
4. 雋雪艶・高松寿夫 共編 白居易与日本古
代文学 北京大学出版社 2012 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高松 寿夫 (TAKAMATSU, Hisao)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 40287933